政府の道具共

大杉榮

政治上の諸問題社會の諸事業に對する批判の正鵠を誤ることは軈て國民生活の破滅である。而して斷案の正確を得るには最も多くの議論と材料とを得て最も冷靜な檢覈を加へねばならぬ本紙が永く大杉榮君の「無政府主義の父」を連載しつゝあることも此の意味に於て大方の期待に酬ひ得たことを喜ぶものである。殊に最近の一問題たる政府の議會に提出せる過激社會運動取締法案なるものが、紛々たる贊否兩論の間に置かれてある。之に對し政府及び議會の論議は、屢傳へられて居るが社會主義者中最も權威ある議論を聞く機會の甚だ乏しかつたことを憾みとし、幸に大杉君の稿を得て直に之を掲載することゝした。

今、政府の過激思想取締法案に對して、大ぶあちこちに反對の聲があがつてゐる。

しかしそれは、果してほんとうに反對なのだらうか。

試みに其の反對の聲なるものを聞いて見る。

無政府主義や、共産主義や、其他の朝憲を紊亂するやうな思想の宣傳を許せとは云はない。其の宣傳や實行に對して嚴罰を加へなければならん事は勿論である。たゞ其の條文が曖昧だ。餘りに抽象的だ。役人の手心一つで勝手放題な取締が出來さうに見える。それでは吾々善良な新聞雜誌記者や學者が間違つて引つかゝる恐れがある。そんな法律はいけない。

まあ、大がいはかうだ、もつと體裁のいゝやうな事を云つてゐるものもあるが、詮じつめればやはり先づかうだ。

反對どころぢやない、立派な贊成だ、そして此の善良な新聞雜誌記者や學者等は、其の謂はゆる反對によつて、此の法律を通過せる有力なお手傳ひをしてゐるのだ。

彼等の謂はゆる反對運動が盛になつて、遂に之れが効を奏したと假定して見るがいゝ。果してどうなるか。

要するにそれは今回の法案の修正である。彼等善良な新聞雜誌記者や學者等のめつたに引つかゝる事のない、しかし無政府主義者や共産主義者や其他の直接行動論者に對して容赦のない修正である。

が、それだけならまだいゝ。

それは彼等の謂はゆる反對があつてもなくても來る事であるだらう。しかしそれと同時に、これこそはほんとうに彼等のお蔭で、もう一つ來るものがある。

それは、斯くして出來あがるだらう法律に對する、世間の服從である。

あの亂暴な法律案が、絶對多數の政府黨によつて、あの儘無事に通過するとする。誰れが、どんな馬鹿者が、そんな法律に衷心から贊成しよう。で、政府はそつと民主主義者とも云はれてゐる謂はゆる進歩思想の人々の持ち出すだらう修正案を、喜んで受けいれるに違ひないと。彼等でさへ贊成したのだからと云ふ事が、一般世間を瞞すのに一番いゝ方法だからである。

此の點に於て僕等は、明白に僕等の敵であらうとする政府其者よりももつと、自分だけいゝ子になつて政府の道具にならうとする、彼等進歩主義者等を憎むものである。

政府がどんな無茶を僕等に爲ようと、僕等はそれを政府當然の仕事として受けいれる。僕等自身の態度をきめればいゝのだ。けれども此の謂はゆる進歩思想家等に對しては、民衆が欺され易いだけ、それだけ僕等は默つてゐる事が出來ない。

先づ彼等を〇〇すんだ。

無政府主義の父

ミシエル・バクウニンの生涯

第二編（1）

大杉榮

バクウニンは、一八六四年から六六年まで、初めはフイレンツエに後にはナポリにゐた。

そこで彼れは、最初は先づ彼れ獲得の社會主義の宣傳を目的とし、時が來たら實際運動を目的とする、國際的の秘密結社をつくらうとした。そして先づ、宗教的傾向と純粹の政治的目的とのために創られたマヂニの團體を攻擊する一方法としてイタリイの友人等と一緒に一團體を組織した。

此の團體は、イタリイでの最初の社會主義團體で、最初は社會民主同盟と名づけられた。が其後ドイツの社會主義者等が此の「社會民主」と云ふ言葉に强い議會的な意味をつけて了つたので更に社會主義革命家同盟と名を改めた。

此の同盟はバクウニン自身によるに「マヂニの宗教的及び政治的の獨斷論に反對して社會主義を主張するために創れたもので、其の綱領の中に、無神論と、一切の權威や權力の完全な否定と、法律上の權利の廢止と、個人を自由人として見ないで國家の公民として考へる事の否定と、集産制とを主張した。同盟は又、勞働が社會組織の基礎でなければならない事と、社會組織は下から上に及んで行く自由な聯合でなければならない事とを宣言した」

前に云つたやうに、此の同盟は最初は全くイタリイばかりであつたが、やがてそこへフランス人や、ボオランドや其他の諸國の人がはいつて來た。イタリイ人では、いづれも代議士の、ジユセツペ、フアネリとサヴエリオ、フリツシアがゐた。フランス人では、アルフレツド、タランデイエや、エリイとエリゼとのルクリユ兄弟や、アリイステイド、レエや、ベ、マロンやアルフレツド、ナツケがゐた。ポオランド人では、ムロツコウスキイや、ニコラス、ジユコフスキイや、シヤル、ペロンがゐた。

一八六六年七月、バクウニンは此の同盟に就いてヘルツエンとオガレフとに、次ぎのやうな手紙を送つた。

「君等は僕の無爲を非難してよこした。しかもそれは僕が今までにない活動をした時にだ。と云ふのは、此の三年間（一八六四年、六五年、六六年）僕の一の仕事は國際的の社會主義及び革命主義の秘密結社を組織する事にあつたのだ。君等が又君等の宣傳のために取つた方針や君等の氣質から見て、君等がこれに加はらない事は確かだと思ふけれど、君等の信義と隱蔽とは十分信用してゐるので、此の結社の主義や組織を詳しく書いた綱領を送る。僕はそれを別封にいれて送つたが、此の手紙と一緒に侯爵夫人（オボレンスキー）が君に渡すだらう。「三年間の努力の後に、僕は漸く多少の實際的結果を得た。今では、スヱデンにも、ノルウヱにも、デンマルクにも、イギリスにも、佛蘭西にも、スペインにも、イタリヤにも、會員がゐる。又波蘭の同志もゐる。露西亞人も幾人かゐる。南部イタリイのマヂニの團體の大部分は僕等の方に來た」

バクウニンがヘルツエンに送つた此の綱領と云ふのは、後に「組織」及び「革命問答」の題で發表された。

右情報ハ讀賣出候也

財團
協調會